

下でお針仕事、お店は若い衆が集つて居りますが此の奉公をして居ります時分は夜分燈火おひかりを見ると居眠りの出るもので、此の又居眠をして居るのは頭を前に細う垂れまして目がふさぐと口が開きます、陰陽で。電車の中などで宜う見うけますが居眠ぶつて隣の人に凭もたれて行く人があります。これを起すと随分面白い顔をするもんで、豆鐵砲を食ふた鳩みたいに目ばかりパチつかして何やムニヤ／＼と口を動かして居りますもんで、

「これチョツと、これ、これ……」

「フエ、ア、、、、、（欠伸）ムニヤ／＼……」

「番頭さん甚い遅うなつて氣の毒やしな、且さんがお出ましになるとお歸りが遅いので貴郎方皆眠むたいやらうのに」

「どう致しまして」

「なにか、貴郎旦さん何方へお越になつてやつたか知つてやないか」

「へい私は且さんのお出かけの節に帳面を調べて居りましたので何方へお越になつたか一向に氣がつきませなんだ」

「ア、そうか、常七、貴郎旦さん何方へお出ましになつてやつたか知つてやないか」

「へえ私は且さんのお出ましの時に二番藏へ這入つて居ましたので且さんのお出ましになつたのも存

じまへん」

「そうか、アノ太七、貴郎旦さん知つてやないか」

「へえ奥さん何でござります」

「イエ貴郎旦さんを知つてやないかと尋ねてますねがな」

「へ、、、、へ、奥さん串戯を仰しやるにも程がござります。且さん知つてやないかて、存じて居ります私御當家へ十三から御奉公に参りまして當年二十八歳になります。十五年間明暮見て能う知つてます。且さんは背のスラリと高い色の淺黒い眼のパツチリとした苦味の走つた美しい男で」

「これ誰が其様な事を聞いてます。且さんは何方へお越になつてやつた知つてやないかと尋ねますねがな」

「へえそれは一向に存じまへん」

「何を云ふてやね。アノ源助」

「存じまへん」

「妾まだ何も云ふてやへんがな」

「モウ仰しやるやろうと思ふて口を開いて待てましたんや」

「源助と云ふただけやのに存じまへんやなんて妾が女やと思ふて馬鹿にしてからに、どうせ貴郎方は